

# 一日も早くロシア軍の完全撤退と平和的な解決を 中川幹太市長が本会議場でも訴え

3月議会の一般質問が18日から始まり  
ました。

一般質問の初日、今議会で最も注目  
すべき発言が中川幹太市長によって行  
われました。牧田議員の質問の際の、  
中川市長の前置き発言と答弁です。

同市長は牧田議員の質問に答える前  
に「ロシアの侵略について、一言申し  
上げたい」として、「このたびのロシ  
アによるウクライナへの侵略と核兵器  
の使用を示唆した一連の行為に対し  
て、非核平和友好都市を宣言する本市  
として、決して看過できないことから、  
ロシア大統領に議長と連名で強く抗議  
した」「人々の尊い命を守り、世界の  
恒久平和を実現するためにも、一日も  
早くロシア軍の完全撤退と平和的な解  
決を強く願っている」とのべました。

この発言にあるように、中川市長は

2日、飯塚義隆市議会議長と連名で、  
「ロシアがウクライナ侵略に踏み切  
り、核兵器の使用を示唆した一連の行  
為」に言及、「国際社会の平和と秩  
序、安全を脅かし、明らかに国際連  
合憲章に反する行為であり、断じて容  
認できるものではありません」など  
とした抗議文をロシアのプーチン大  
統領に送付していました。

市長が一般質問に答える前に本会  
議場でこうした発言をするのは異例  
ですが、感動の訴えでした。

そして、もうひとつ、牧田議員か  
ら、被爆国である日本が核兵器禁止  
条約に参加していないことを問われ、  
市長は、「本市はすべての国の核兵器  
が速やかに廃絶され、恒久平和が確  
立されることを願って、平成7年に『  
非核平和友好都市宣言』をしている。この



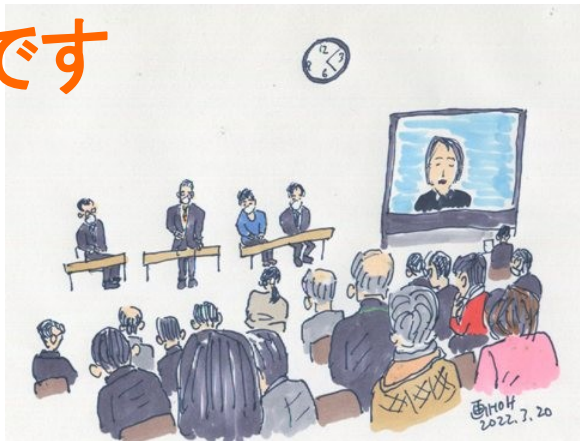
宣言の趣旨と一切の核兵器の禁止と核  
兵器による犠牲者への支援を掲げた核  
兵器禁止条約の趣旨とは共通するも  
の、すべての国がこの条約を批准す  
ることを願う。私としても核兵器の  
廃絶と世界恒久平和の実現に向けて  
取り組んでまいりたい」と答えたの  
です。

これも、核兵器の廃絶と平和を願  
う立場からの感動の発言でした。

## 30km圏内は原発の地元です

柏崎刈羽原子力発電所30km圏内（UPZ）議員研究会  
総会が20日、見附市で開催されました。

総会では、茨城大学の原口弥生教授がリモートで講演、  
原発再稼働の自治体にとって、「事前了解権の2条件」と  
して、「実効性のある広域避難計画」と「住民の理解」が  
重要だと指摘しました。また、島根原発をめぐる、中国  
電力が鳥取県等に提示している原子力安全協定改定案で  
は、事前了解権という言葉は使っていないものの、「事前  
報告」という表現で、「（県側へ）施設の変更などを報告し、  
意見があれば『誠意をもって対応する』」としていること  
も紹介しました。重要な動きです。



【コハコベ】（再掲）ナ  
デシコ科の越年草。漢字  
で「小繁縷」と書いま  
す。花期は3月～9月で  
す。農道、あぜ道など  
で、オオイヌノフグリや  
ヒメオドリコソウ、タネ  
ツケバナと一緒にこと  
が多いです。草は柔らか  
く、茎は良く広がります。  
花は白で花弁は5枚  
です。花言葉は、「愛ら  
しい」「密会」「ランデ  
ブー」などです。写真は  
21日、大乘寺で撮影。



**吉川区川谷でまた  
大規模な土砂崩れ**

吉川区川谷で大規模な土砂崩れ  
が発生していることが16日の朝、  
わかりました。  
現場は17年前の6月、発生した  
土砂崩れの場所とほぼ同じです。  
規模は前回よりも大きく、巾11  
0m、長さ300mにもなりま  
す。県道大湯高柳線は不通です。  
私は17日と25日は単独で、21日  
は党議員団及び地質研究者のみな  
さんと現地に入りました。地元  
の大問題として頑張ります。

はしづめ法一の  
活動レポート

No.2054 2022.3.27

発行編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず  
Tel 025-548-3628

通じないときは 090-5392-1961

E-mail hasiznyg\_0808@yahoo.co.jp

URL <http://www.hose1.jp/>



ブログ  
「ホーセの見  
てある記」は  
← こちら

橋爪法一

検索

# 春よ来い

## 第七〇一回 生還

吉川区上川谷に住む俊一さんが転んで大けがをし、「どうもよくないようだ」と聞いたのは昨年暮れだったと思います。

俊一さんと二〇年以上も前から親しく付き合いをさせてもらっていたので、普通なら病院へ見舞いに行かねばならない関係なのですが、行けませんでした。

俊一さんと付き合ひのあった人からの情報では、「もう食事もとれず、点滴だけで何とか命をつないでいるようだ」とのことでした。そうなれば、安静状態を確保しなければなりません。新型コロナ感染症のこととがなくても、見舞いは遠慮しなければならぬと思います。

正直言うと、その後、三か月以上にわたり、毎朝、新聞の「お悔やみ欄」を見るたびに、俊一さんの名前が出てくるかもしれないと、思っていたくらいです。

それが、先日のお昼頃、気になって俊一さん宅を訪ねたところ、お連れ合いの美枝さんが、玄関のところへ来られ、「橋爪さん、とうちゃんの顔、見ていきなると」と聞かれたのです。

びっくりしましたね。何と、俊一さんはすでに退院されていたのです。美枝さんが、先に歩き、「橋爪さん、来てくんたよ」そう言いながら居間に入るとき、私にはベッドが見えました。「ああ、ベッド生活になってしまったのか」そう思って、ベッドの上を見ても俊一さんの姿はありませんでした。

何と何と、俊一さんはコタツに入って私の顔を見ておられるじゃありませんか。

「わあ、とうちゃん、元気になんたがかね。いかったあ。よく頑張ったねえ。きょうは悪いニュースを聴いてがっかりしていたがでも、こりゃ、最高にうれしいニュースだ。いかった、いかった」

目の前の俊一さんは七九歳、入院する前より少しやせてはいましたが、とても生死

にかかわる事態になったとは思えないほど回復しておられたのです。もう、うれしいやら、びっくりするやら……、私は正座したまま、俊一さん夫婦と話を続けました。

美枝さんによると、一時は脳内出血の影響なのでしようか、錯乱状態になるなど、たいへんな状況だったとのことですが、点滴から次第に「おかゆ」を食べられるようになった、しかも病院で出された「おかゆ」の量では足りないほどの食欲も出てきたというのです。それだけでもすごいなと思ったのですが、俊一さん本人も「何とんでも、もう一度、家に帰ろう」と病院内を毎日歩いて体力づくりをしたとのことでした。意志の強い人だと改めて感じました。

俊一さんは長年にわたって冬期保安要員をしてくださった方です。私は市議になつてから、大雪になった時には、必ずと言ってよいほど俊一さんを訪ね、その仕事ぶりを見てきました。

集落内道路の確保、独り暮らしのミヨさんやシズエさん宅の木戸先の除雪、消防ポンプ小屋の確保など、大雪のときはそれこそフル回転で働いてくださいました。それだけではありません。冬期でなくても、地域の人が困っていれば手助けする、そういう大事な存在となっていました。

私が訪ねた日は退院後間もない時期だったのですが、俊一さん夫婦は裏山の雪崩が家のそばまでやってきたことがあること、土石流で怖い思いをしたことがあること、かつて集落に大勢の人たちがいた時代のことなどをたっぷり話してくださいました。

俊一さんは最近、デイサービスにも通い始めたといひます。そこで出される「おかゆ」の量も足らなく感じるということでした。この調子なら、どんどん回復して、もう一回、田んぼや畑をしたいということになるかも知れません。そこまでいかなくても、元気でいてほしい。

## この日を待っていた…吉川で生涯学習フェスティバル開催

吉川区生涯学習フェスティバルが20日、21日と吉川コミュニティプラザで開催されました。

作品展では、「押し花あじさいクラブ」のみなさんの押し花作品や瘦辺幸雄さんの油絵、村松直子さん、細井一貞さん、笹崎つや子さんの水彩画、山岸育子さんの水墨画、竹細工教室のみなさんによる竹細工、横田秀夫さんの木彫などの作品、大谷和男さん、上野成さんの短歌などが展示されていま

した。いずれも力作ぞろいでした。

このうち吉川区国田の横田秀夫さんの舟、木彫作品には大きな関心が寄せられていました。横田さんは吉川区町田で前方後円墳を発見した人ですが、一連の作品はどれも精密で、まさに「すごい」という言葉がぴたりあてはまるものばかりです。大きな舟は、埼玉県は飯能市で出た杉の間伐材を使ったということですが、節がひとつもなく、杉の木目が美しい作品でした。

21日の芸能発表会はコミュニティプラザの大ホールで開催され

ました。コロナ禍で思うように練習できない、発表会も激減した、そうしたなかで、出演した団体のみなさんは歌も踊りも演奏もとても楽しそうでした。みんな、この日を待っておられたんですね。

### 上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	3月16日(水)	3月23日(水)
上越南消防署	0.050	0.057
上越北消防署	0.050	0.047
新井消防署	0.050	0.050
頸北消防署	0.050	0.043
頸南消防署	0.060	0.060
東頸消防署	0.040	0.050
名立分遣所	0.060	0.070
高士分遣所	0.053	0.047



# 春よ来い

## 第七〇一回 生還

吉川区上川谷に住む俊一さんが転んで大けがをし、「どうもよくないようだ」と聞いたのは昨年暮れだったと思います。

俊一さんと二〇年以上も前から親しく付き合いをさせてもらっていたので、普通なら病院へ見舞いに行かねばならない関係なのですが、行けませんでした。

俊一さんと付き合ひのあった人からの情報では、「もう食事もとれず、点滴だけで何とか命をつないでいるようだ」とのことでした。そうなれば、安静状態を確保しなければなりません。新型コロナウイルス感染症のこととがなくても、見舞いは遠慮しなければならぬと思います。

正直言うと、その後、三か月以上にわたり、毎朝、新聞の「お悔やみ欄」を見るたびに、俊一さんの名前が出てくるかもしれない、思っていたくらいです。

それが、先日のお昼頃、気になって俊一さん宅を訪ねたところ、お連れ合いの美枝さんが、玄関のところへ来られ、「橋爪さん、とうちゃんの顔、見ていきなると聞かれたのです。」

びっくりしましたね。何と、俊一さんはすでに退院されていたのです。美枝さんが、先に歩き、「橋爪さん、来てくんたよ」そう言いながら居間に入るとき、私にはベッドが見えました。「ああ、ベッド生活になってしまったのか」そう思って、ベッドの上を見ても俊一さんの姿はありませんでした。

何と何と、俊一さんはコタツに入って私の顔を見ておられるじゃありませんか。

「わあ、とうちゃん、元気になんなつたか。いかに悪いニュースを聞いてがっかりしていたが、こりゃ、最高にうれしいニュースだ。良かった、良かった」

目の前の俊一さんは七九歳、入院する前より少しやせてはいましたが、とても生死

にかかわる事態になったとは思えないほど回復しておられたのです。もう、うれしいやら、びっくりするやら……、私は正座したまま、俊一さん夫婦と話を続けました。

美枝さんによると、一時は脳内出血の影響なのでしようか、錯乱状態になるなど、たいへんな状況だったとのことですが、点滴から次第に「おかゆ」を食べられるようになった、しかも病院で出された「おかゆ」の量では足りないほどの食欲も出てきたというのです。それだけでもすごいなと思っただけですが、俊一さん本人も「何とかも、もう一度、家に帰ろう」と病院内を毎日歩いて体力づくりをしたとのことでした。

意志の強い人だと改めて感じました。俊一さんは長年にわたって冬期保安要員をしてくださった方です。私は市議になつてから、大雪になった時には、必ずと言ってよいほど俊一さんを訪ね、その仕事ぶりを見てきました。

集落内道路の確保、独り暮らしのミヨさんやシズエさん宅の木戸先の除雪、消防ポンプ小屋の確保など、大雪のときはそれこそフル回転で働いてくださいました。それだけではありません。冬期でなくても、地域の人が困っていれば手助けする、そういう大事な存在となっていました。

私が訪ねた日は退院後間もない時期だったのですが、俊一さん夫婦は裏山の雪崩が家のそばまでやってきたことがあること、土石流で怖い思いをしたことがあること、かつて集落に大勢の人たちがいた時代のことなどをたづねたり話していただきました。

俊一さんは最近、デイサービスにも通い始めたといひます。そこで出される「おかゆ」の量も足らなく感じるといふことでした。この調子なら、どんどん回復して、もう一回、田んぼや畑をしたいということになるかも知れません。そこまでいかなくても、元気でいてほしい。

（この部分のテキストは上記の重複を修正し、内容を整理しました）

## 安倍元総理などの「核共有」議論、豪雪対策などで質問



私は24日、ロシアのウクライナ侵略と市の平和政策、豪雪対策などで一般質問をしました。

まず、プーチン大統領の核兵器使用示唆発言を契機に安倍元総理や日本維新の会などがアメリカと共に核兵器を共有すべきだという暴論を展開していることについて市長の考えをたずねました。これに中川市長は、「あらゆる核兵器の廃絶を願う非核平和友好都市を宣言した自治体の長として、“核共有”は容認されるものではない」と答弁しました。

市内中学生の広島記念式典派遣については、式典に参加できない事態となっても、広島へ派遣し、原爆資料館や原爆ドームを訪れ、被爆者の声を聴くことを

したらどうかという私の提案に、市長は、「派遣事業の実施方法等の見直しに関しては、教育委員会、学校関係者との協議も含め、検討してまいります」と答えました。今後の動きに注目です。

豪雪対策で取り上げたのは、豪雪に対する基本認識、国の豪雪時の災害救助法の適用をめぐる後退姿勢です。

まず、豪雪について、1981年2月の「豪雪それ自体が災害だ」（原健三郎国土庁長官）という政府見解がいま崩されようとしているなかで、市長の考えをききました。

市長は、昨年、今年の大雪を経験するなかで、「改めて豪雪は災害であるとの認識を深めた」とのべました。ぜひこの立場で頑張してほしい。

また、私は、災害救助法適用下において、政府が「応急救助として除雪が必要な住家（障害物の除去）」の対象をせばめ、「人命にかかわるかどうかの証明を求める」事態となっていること、新潟県内では昨年の5900件の申請のうち、900件がまだ決まっていないことを明らかにし、市の見解を求めました。笠原

福祉部長は「上越市でも数百件がまだ決まっていない」と答え、中川市長は、「私も、今回の国の判断対応については、非常に憤りを感じている。県と県議会、そして国会議員にも協力してもらい、全力で対応にあたりたい」と答えました。

### 上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	3月16日(水)	3月23日(水)
上越南消防署	0.050	0.057
上越北消防署	0.050	0.047
新井消防署	0.050	0.050
頸北消防署	0.050	0.043
頸南消防署	0.060	0.060
東頸消防署	0.040	0.050
名立分遣所	0.060	0.070
高士分遣所	0.053	0.047